

# 京都大学医学部医学概論講義「戦争と医学」(090512)の結果

吉中丈志（京都民医連中央病院）

2009年5月12日に標記講義を行いました。京都大学医学部で731部隊の問題を取り上げる初めての講義であったと思われます。全学共通講義のため09年度入学の医学部生とともに各学部の学生も参加しており、116名（医学部102人間健康科学10法3経1）の聴講でした。学生の受け止めは真摯なものでした。

最初に学生の知識を知る上で、アウシュビッツ、731部隊というキーワードをあげ知っているかを挙手で訊ねてみました。知識の程度については不問にした問いかけでしたが、前者は約半数が手をあげ、後者は10人未満でした。予想より少ないことが判り、事実をきちんと伝えることに留意して講義を進めた次第です。学生は90分間熱心に聴講していました。

以下に感想文から課題の抽出を試みてみました。今回の実行委員会には所用ができて参加できませんので、「戦争と医の倫理」の検証を進める会の取り組みや今後の活動の参考になるかと考えお送りします。

## 記

[I]事前に講義要項を以下のようにまとめた。

目的：医療倫理（生命倫理）の原点が医学と戦争との関わりにあることを理解する。

### 医療倫理教育の 2. 医療倫理史SGL の基礎講義的な位置付け。

\*医療倫理の歴史と現状について説明できる。

各時代・各文化の医療観・医師像の歴史の変遷を理解し、各自が持つ（現代の）医療観・医師像との違いに気づかせ、倫理問題の考察には時代背景や文化背景を考慮する必要性を学ぶ。また、本カリキュラムで扱う倫理問題を歴史的事例を通して発見させ、現代医療を相対的、客観的に考察する視点を持たせる。

\*テーマ例 「西洋の医師像の変遷」「実験医学の成立」「生命倫理学の成立」「医師の倫理綱領」「日本の医師観・医師像」「明治時代における医療の制度化」「戦争と医学」「戦後の医療改革」「遺伝子医療の発展」「情報化社会における医療」など

方略：スライドと講義資料

医療倫理は現代の医療や医学研究においてますます重要な役割を持ってきている。ニュールンベルグでの実験以降、医療倫理が持つ範囲は広がり続け、医療や医学研究のあらゆる分野を包摂するに至っている。しかし、医療や医学研究の悪用や医学・医療分野の新たな広がりとの関係を歴史的に概観したものはない。

6年間の医学教育を通じて、医療倫理の歴史と現状について述べるができることが目標であるから、ニュールンベルグの実験と同様の位置にある十五年戦争時の

日本の医学犯罪に焦点を当てて、戦争と医療について考え、現代の医療倫理とのかかわりを理解する。

講義内容 (時間は90分)

1. 自己紹介

II. 「戦争と医学」導入：なぜ戦争なのか

①英文雑誌へunit731が登場

オーム真理教の後JAMA

9・11炭疽菌テロ事件の後のJAMA

米国陸軍感染症研究所 生物兵器被害者医療管理ハンドブック

②日野原重明氏 朝日新聞

③SONIA SHA 「Body Hunter」 (単行本)

④アメリカの公文書公開

⑤中国ハルビン

⑥日本の新聞

国際シンポジウム

京大病理学教室杉山武敏元教授

⑦医学は進歩、戦争は継続

Prime suspect アブ・グレイブとガンタナモ

アメリカからの報道

沈黙の日本、議論のアメリカ、双方とも非人道的人体実験を實行

戦争放棄に対する態度

医療が命や健康を損なう →後でもう一度検証して結論

医療事故 「to err is human」 (組織事故) 真実表明と謝罪

薬害 サリドマイド 個人の責任 医師、行政、企業、患者

臓器移植、終末期医療、生殖医療など 日常診療の問題

医療倫理、生命倫理

III. A:戦争と医学 日本で押さえるべき歴史的事実

①京都大学医学部の封印された歴史

日野原先生 「14名ものノーベル賞受賞者をハーバード大学医学部は出している。そのうちで一番価値があるのはバーナード・ラウンの平和賞だ。」

京都大学医学部100周年記念講演で

日野原先生 石井四郎中将の思い出 朝日新聞

杉山武敏先生 京大病理学教室100年史 十五年戦争と日本の医学医療研究会

731部隊・・・・・・・・

731部隊だけではない・・・・・・・・

陸軍病院、海軍などでも・・・・・・・・

植民地政策の中で・・・・・・・・

九州大学でも・・・・・・・・

731部隊などは罪に問われなかった。

理由は・・・・・・・・

B:戦後の出発

ニュールンベルグコード→ヘルシンキ宣言

世界人権宣言→ジュネーブ宣言→リスボン宣言

WMA ドイツ医師会 「人間の価値」

21世紀の医師憲章

日本医師会 医師の職業倫理指針

ニュールンベルグ裁判 東京裁判 ハバロフスク裁判 中国軍事法廷

日本の医学界は検証抜きに再出発

日本政府、占領軍の方針

法曹界にも同じ構造があるがAutonomyが違う。

戦争と医学を検証し平和と医学を目指す。

## [II]学生感想

感想文から特徴を抽出し医療倫理の課題を探る一助にしたいと考えています。特徴的な意見を上げると以下ようになります。

①多くの学生がアウシュビッツのナチスの医学犯罪については聞いたことがあっても 731部隊については知らなかった。聞いたことがあるという学生も具体的な事実は今回初めて聞いたというものが多かった。

「生体実験というとアウシュビッツの話ばかり考えていたが、日本人も世界的に有名な人体実験を行っており、そこには京都大学の方もたくさん関わっておられたということに対し、恐ろしく感じた」

②731部隊の人体実験に対しては、事実そのものと残虐性がショックであったという感想が多い。また、自分が入学した京都大学が深くかかわっていたことについてもショックだと記載した学生が少なくない。

「731部隊の名前は聞いたことがあるような気がしたけれど、生体実験のために多くの人が殺されたところだとは知らず、ショックだった。医療は人を元気にするものなのに、その全く逆のことをしていたなんて信じられない。しかもそうした事実を今まで知らなかったことが恥ずかしい。戦争についてもっと知識を伝えていかないと同じことが起こるのでは

ないかと怖い」

③終戦後アメリカとの取引で関係者が免罪され隠蔽されてきたことについて問題を指摘する意見が多くみられた。

「アメリカとの取引によって裁かれないばかりか、その構成員たちが戦後要職に就いたというのは理解できません。戦争という特殊な環境にいたとはいえ、その後彼らがどのような気持ちで 731 部隊を振り返ったのか、あるいは振り返らなかったのかが気になります。医師が人を治すため、戦争に勝つために人を殺すということを知り、背筋の凍る思いでした。」

「日本がデータを米国に提出することで 731 部隊の人体実験がお咎めなしとなったというのは少し気になる。正義とは何か。」

「封印していたらそもそも反省できません。知って、ぞっとするだけでも、こういった悲惨な出来事が二度と起こらないようにすることにおいて有意義だと思います。」

④過去のこととしてすませず、事実の検証、反省と謝罪が必要であるとする意見も多い。

「日本はそのことを隠蔽して他国の非人道的行為は非難するのに、自国のは無いものとしているのはとてもタチが悪く（ドイツは潔く認めているのに）とても卑怯で反省すべきだと思います。」

「日本などの国々は被害者に国全体で謝らなければならないと思う。今後そのようなことが起きないためにも、医療者全体で意思固め、国の不合理に勇気をもって立ち向かうべきだと思う。個人的には自分に罪があるならそれをつぐなわなければいけないと思う。」

「日本もこれほどまで残忍なことをやったのだということを後世にきちんと伝えていくべきだと思います。」

「731 部隊あるいは日本が過去に犯した罪から学ばなければならないことはたくさんあると思うし、医療倫理、生命倫理の基礎に、こういった事実に対する反省、あるいは純粋に歴史的に考観できる態度が必要だと思う。」

⑤医師自身の倫理性と同時に戦争という状況を回避する必要があるという認識も少なからずある。

「医学に携わる者たちは、軍の圧力にも屈しない強い意思を常に持ち続けなければならないと思った。それ以前に軍や戦争がなくなるのが最も理想的であるが。」

「医師も社会の中で生きている。社会の考えにそぐわないことをいくら医師達が正しいと思ってもやってはいけない。しかし、社会が間違っていたらどうする。戦争は社会の誤りであったのだろう。ここから学ぶことで、戦争はいけないという倫理が生まれる。」

「戦争が起これば人は死に、人は正気を失う。731 部隊の事件を再び起こさないようにするためには、まず、戦争が起こらないような世界をつくるしかないと思う。」

⑥現実の世界では戦争があること、薬剤開発など人体実験は避けて通れないことなど現代に通じる問題性を感じるとした意見も多い。

「ワクチンの臨床実験なども生体実験のものであるので、どのように現在行われているのか調べておこうと思います。」

「生物兵器などの被害は未だ続いているし、医学が悪用されないように早くしないといけないと思った。」

「人体実験のような倫理問題は戦争中だけでなく現在にも当てはまる。そのためにも、人体実験の問題を正面から見つめるべきであることが分かりました。」

「それは過去の問題だと思っていましたが、エボラウィルスのワクチンを米軍兵士に自由意志で使せたり、現代にも残る問題だとは考えたこともありませんでした。」

⑦医学の進歩には人体実験は避けられず、非人道的な 731 部隊の実験ではあってもそのことがあって現代医学の発展も切り開かれた面もあるのではないかと、という意見が少なからずあった。

「このような生体実験は医学の進歩にどれほど役立つのだろうか。」

「現在のすばらしい医療があるのは、戦争中の人体実験があったからかもしれない」

「人体実験で得られたデータや知識は、戦時、戦後の医学の発展に確かに貢献したとは思いますが。」

「ナチスのアウシュビッツの話は有名であり、それにより医学が進歩したことは確かであるが、人の命をマウス同様に扱うことには疑問が残る。」

「・・・おそろしいことだと感じました。そのあやまちから学ぶことはあったと思いませんし、医学も発展したかもしれません。」

「この研究成果は確かに貴重なデータを残したのであろうが、医師として本当に尊重すべきは・・・」

⑧そのほか犠牲者自身の身になって考える、自分個人の倫理観を問う、などもあった。

### [Ⅲ]今後の課題として

医学生感想からも事実の「検証」は第一義的課題であることは疑問の余地はないと思えます。その上で、反省、真実の説明と謝罪、生命倫理・医療倫理の前進、社会的規範の確立などの課題があるのだと思えます。

医学会総会に向けた取り組みはなによりも事実の検証が重要であり、呼びかけの趣旨に賛成です。できるだけ幅広い資料や証言の収集にとりくむことは意義があるでしょう。並行的に以下のことに取り組むことが必要であろうと考えています。ただし、検証を求める会だけでなく、戦医研など各個人、研究会、団体などが実情に応じて取り組めればよいと思えますが。

⇒防疫研究室報告の医学的、専門的な評価（科学的妥当性について）は大きな課題であると考えます。これは学際的に行われる必要があるでしょう。戦医研の防疫研究室報告解題を足掛かりにすることもできます。おもに⑦のような声や疑問に対する検証という意味です。

⇒医学実験とインフォームドコンセントという生命倫理の二つの流れについては改めて説明が必要である。土屋氏の整理がさしあたって基礎になるのではないか。

⇒ドイツでも検証が十分でないことは明らかなので、この点を踏まえた比較検討も課題だろう。

⇒医学教育誌に別紙を主張として再投稿しています。医学教育の専門家を交えて国際比較研究に取り組めればよいと思います。腹案としては熊本大学の浅井篤教授に持ちかけてみようかと考えています。8月にお会いする予定です。

以上です。